



理解, 協力, 感謝, 信頼

黒岩 麻里



私は今から4年前に、現在のポストに就きました。当時は学術振興会特別研究員として研究に従事していたのですが、その約半年前に出産し、子どもを保育所にあずけながら、なんとか研究を再開させ始めた頃でした。学位をとってからのキャリアも浅かったため、公募に申請した際も、採用されることはまずないだろうと覚悟をしていました。ですので、採用の連絡を受けたときは、信じられないくらい嬉しい気持ちと、大きな不安やプレッシャーを同時に感じました。私の子どもは生まれつき、外科手術を必要とする疾患をもっていたため、着任後も継続的な入院、手術が決まっていたからです。病気がなくとも、子育てと研究の両立はとても大変なものです。

着任してからはプレッシャーを感じる暇もないくらい、夢中で毎日が過ぎて行きました。研究に割ける時間が少ないため、焦りを感じることもありました。研究者としての自信を喪失することもしばしば。それらは今でも変わらぬ悩みです。それでも、ここまで研究を発展させることができたのは、身近な人たちの理解と協力のおかげです。身近な人たちとは、パートナーはもちろんそうですが、特にここで述べたいのは、研究室のボス、スタッフ、学生さんたち、です。子どもの看護などから、どうしても休みがちな時期がありました。急に熱を出して保育所まで迎えに行ったり、入院の付き添いで休暇が続いたり。そういった事情を理解し、サポートしてくれるボスやスタッフの存在があったからこそ、今の自分が、研究があります。研究は、決して一人で成し得るものではありません。多くの人の力添えがあるからこそ、成果が実るのです。これは、どんな状況の時でも当たり前のことです。しかし、キャリアを積むのに必死な頃というのは、つい視野が狭くなりがちで、身近な人への感謝の気持ちが薄らいでしまいます。

私は、希少種かつ天然記念物である哺乳類種を研究対象としています。天然記念物の捕獲には、国の許可が必要で、また、ラボワーク中心の私にフィールドでの野生動物の捕獲、調査などできるはずもなく、本当に多くの方の協力を得て、研究を進めています。研究を進めれば進めるほど、人の輪がひろがっていきます。人と人とのつながりや絆が、研究成果へと導いてくれます。今、まさしく研究者を目指している若い人たちには、身近な人

への感謝の気持ちを忘れないでほしいこと、また、研究面での信頼関係をしっかり築くことを伝えたいです。

大学院生時代は、自分が女性であることで、将来不利な状況になることを恐れ、人一倍業績を積む努力をしました。同じ能力、同じ業績なら、男性の方が有利だと思っていました。「同じ」では負けてしまうから、「優位」でなければならないと。結婚にも子どもをもつことにも、興味はありませんでした。自身の研究のことを考えるだけで、頭がいっぱいだったからです。そんな私が、結婚して子どもを産むことを決意した理由は、その機会に恵まれたことと、また、家庭をもちながらもキャリアを積んで、活躍している女性研究者が増えなければ、若い女子学生が研究者を目指す希望へとつながらないのではないかと、思ったからです。パートナーや子どもをもたずに活躍されている女性研究者も多くいらっしゃいます。家庭をもつことだけが幸せとは思いませんし、仕事に没頭するだけが人生とも思いません。しかし、どのような選択をするにせよ、自分が目指す道を断念せざるをえないのは不幸だと思います。

研究者を目指す女性のパートナーの多くは、研究者であるといいます。「彼氏も研究者を目指しているのですが、将来一緒にになれるか不安です」という悩みを、女子大学院生から打ち明けられることがよくあります。二人そろって同じ研究機関にポストをみつけることなど不可能に近く、多くの場合は別居を覚悟か、どちらかが研究の道をあきらめざるを得ません（多くの場合、あきらめるのは女性側?）。将来に希望がもてず、最終的には研究者の道をあきらめる学生が出てくるとしたら、それは日本の大きな損失です。

研究者を目指す女子大学院生へのメッセージというよりは、そういった大学院生を教育する先生たち、あるいは女性研究者を受け入れる側の研究者の方々に、ぜひ耳を傾けてほしいです。研究も子育ても苦勞はつきものです。男女を問わず、苦勞を楽しみながら働ける環境を整えていかなければ、大学も社会も貴重な人材を逃すことになるのではないのでしょうか。個々の状況を理解し、サポートする体制づくりを、まずはラボレベルから、さらには研究組織、機関、国レベルで真剣に取り組まれることを強く願います。